

## 日中文化交流史

14

鈴木靖

## 東アジアの平和の礎となった思想―儒教

応仁の乱（1467～1477年）以来、100年以上続いた戦国時代。人びとは、秩序なき乱世に苦しんでいました。公家の家に生まれた藤原惺窩もその一人。惺窩は、18歳の時、土豪の襲撃により父と兄を失いました。1598年、秀吉の朝鮮出兵で日本に拉致された朝鮮の儒者姜沆に会った時、惺窩はこう語ったといいます。

「残念です。私は中国に生まれることもできず、また朝鮮に生まれることもできず、日本のこのよるう時代に生まれるとは」（姜沆『看羊録』賊中間見録）

幼いころ仏門に入った惺窩ですが、朱子学に代表される中国近世の新儒学に憧れ、1596年、薩摩から明へ渡航を試みます。風波のため、この計画は失敗に終わりましたが、この地で薩南学派が訓点を加えた『四書集註』（朱子学のバイブルともいえるべき儒教経典の注釈書）を入手します。

その後、姜沆との交流を通じて、大義名分を重んじる朱子学

が、中国や朝鮮の秩序ある社会の要となつていふことを知った惺窩は、還俗してその研究と普及に努めます。

1603年に幕府を開いた徳川家康にとつても、安定した体制の確立や、中国・朝鮮との関係修復は、喫緊の課題でした。内政や外交には、相国寺の僧西笑承兌らが顧問となつていましたが、家康は新たに在野の儒学者を抜擢することにしました。後ろ盾のない在野の学者の方が扱やすかったからでしょう。

この期待に応えて幕府に仕えたのが、惺窩の弟子の一人、林羅山でした。あまりの御用学者ぶりに「能言鸚鵡」と酷評された羅山ですが、その努力によって、朱子学は幕府の官学となりました。

家康の孫に当たる水戸光圀は、明の遺臣で日本に亡命した朱舜水を師と仰ぎ、幼少から舜水の英才教育を受けた安積澹泊を総裁として、『大日本史』の編纂を始めます。

少年時代、奇行放蕩を重ねていた光圀は、18歳の時に『史記』を読んで、伯夷・叔斉兄弟の徳義ある生きざまに感銘を受け、自らの行いを正すとともに、儒教思想にもとづく修史事業によって、秩序ある社会を築こうと考えたのです。

こうして日本が儒教国家の仲間入りをしたことにより、東アジアに200年以上に及ぶ太平の世が訪れたのです。

（法政大学 国際文化学部教授）



中国の儒者 朱舜水



朝鮮の儒者 姜沆